哲学研究
第四百九十六号
第四十三巻
第二冊

『抽象』について

A・N・ホワイトヘッド
神野慧一郎訳

序言（ジョン・D・ゴーヒン教授による）

これらの筆記は、ホワイトヘッドがかれの『宇宙論――古代および近代――』という講義教程で、一九三六年十二月の三・五・八・十の四日にわたって講義したものの、一語一語ほとんどそのままの記録である。その課程中、これらの日に先き立って開かれた集りで、わたくしはかれの助手として、一つの講義をした。その講義の中でわたくしはホワイトヘッドに、かれの『漠然性』の理説をもっとはっきりしたものとするよう求めたのであった。この課程に出席していた学生達は、ホワイトヘッドは哲学的思索における明晰性を軽んじ、『漠然性』(vagueness) または『曖昧性』(muddle-headedness) を推奨しているのだ、という印象をときあって受けていたのである。ホワイトヘッドはこうした類のことを意図していたのではもちろんない。かれは、抽象的思惟が、経験の背後にある半透明な陰影に対してもっている関係に、深い関心をもっていたのである。或る観点から云って、ホワイトヘッドの形而上学を、この関係と本質的にかかわっているもの、と解することも出来るであろう。ホワイトヘッドが経験のうちにもともとあら

わになっていると考えていた『過程』の世界とは、その中では一切のものが他のあらゆるものに関係づけられているような世界、なのである。それ故に、有限な『諸事実』は、有限な諸真理または抽象と同じく、実在性および経験の背景――無限な――と、つき合せて説明されねばならぬ。一つの抽象または有限な真理は、こうした意味において恣意的である。つまり、その背景には、表現されることもあり得たのだが、よかれあしかれ或る理由によって圧し隠されてしまった他のものがいつもあるのである。

ホワイトヘッド講義

一　曖昧性

わたくしは二つの講義案を持っていたのですが、そのうちのどちらを講じるか決定できずにいました。私はやっと決心したばかりです。ゴーヒン博士は、「ホワイトヘッド氏はどんな種類の曖昧性（muddle-headedness）を是認するのか」と問うておられます。ですから、わたくしはお答えしてみたいと思います。

ところで、これは「抽象」についての二つの大きな問題（相互連関性と真理の有限性の問題）とかかわりがあります。それは事物の連関性（connectedness）の考えとかかわりがあります。事物の相互連関性というものを強調している哲学者の誰かを、まあ一寸お読みになって下さい。

ところで、ここに周知の哲学者がおります。ブラッドレイです。彼の著作のいくつかを皆さんが読んでごらんになりさえすれば、皆さん御自身、恐ろしく混乱してしまわれることでしょう。事物が相互に連関しているということが、もしそれらの事物の本質に属するとするならば、その際には、事物の理解は、宇宙の中でそれら事物がどんな場所を本質的に占めているかの理解なくしては、不可能だということになります。だからして、一つの事についてのいかなる言明を試みようとしても、断然宇宙全体をその言明に含めねばならないことになります。

したがって、有限な真理というようなそんなものは存しないのだという難題に逢着することになります。一つの大なる真理だけがあると申せましょう。つまり、理解が無限性を持つということであります。

ところでその難題というのは、つまり、私は自己自身を理解せねばならないだけでなく、自己と他者との関連、及び、これら他者相互の関連を理解しなくてはならないことです。

で、この結果あなた方が事物の相互連関性について一般的な言明をし始める場合のあなた方の決着は、神は一切の事物を直ちに見てとるのであり事物を理解し得るのだが、われわれは決してそうはできないのだ、とすることであります。われわれは決して真理なるものを見出さないのです。

わたくしは想い起こすのですが、数年も前に、或る若い天文学者と語っておりました。その人は、或る事が真として信ぜられるのは何故かと問われて、次のように答えました。「何故といって、私は事物のうちには、或る本質的な折り目正しさ（decency）が根底にあると想定するからです」と。

で、この事を私達が信じる限りにおいて、有限な真理は、われわれにとって可能なのであります。

しかし、もしあなた方が反対の真理に走ったとすると、あなたは小さな有限な真理のみを考慮に入れるのであり、連関性というものをしばらく措く——もっとも、こういうことが実際に可能であるとあなたが信じるとしての話でありますが——ことになります。もしあなた方が、自己は、事物へ関係づけなくても完全な自己なのだと信じるのであるならば、あなた方は当然、事物に関して異常なほどはっきり出来ます。しかし、あなた方は独我論へと戻らされるのです。

すると、世界の残部は、事実上、あなたの存在にふくまれるおとぎ話になります。あなたの役割は、一つの夢を見ることになります。かくして、あなた方は、すばらしく明晰な一つの独我論へと到るのですが、とは言っても、その独我論は、あなたの存在に含まれる一つの明白な事実、つまりあなたが世界の中に存在するということを否定してい

るのです。

これは無意味なことではないでしょうか。わたくしがあなた方に講義しているということが、私の存在の本質ではないでしょうか。かくて、結局のところ、われわれは全くもってデリケートな探究に従事しているわけです。すなわち一方ではわれわれと世界との連関を理解し、又、われわれの存在そのものがこれらの諸連関にかかわっていることを理解しながら、他方では〔有限な〕真理の媒体つまり個々独立で、また、事物の持つ基本的な折目正しさという形で現われているところのかの媒体を、保持しようとしているのであります。このことはそれ故、非常に精妙にして微妙な調整つまり体系化を要します。

ところで、言語に関して厄介なことがあります。つまり、言語は、まさにこのところで奇妙に不精妙なのです。そこでこうしたことは、私がすでに言ったことへ立ち帰ります。つまり、われわれの意識的な知覚は、存在の本質的な諸性質に関しては非常に不精妙なのです。

そこであなた方は過度の明晰性の持つ諸々の危険をお分りになる。或る人の知覚の明晰にして正確な諸部分が宇宙の重要にして内奥なる諸象面をあらわにしはしないのです。

たとえば、わたくしの今持っている知覚は、有色の形体の感覚を与えます。それらは、「それ」であり、「そこ」にあります。けれども、わたくしは有色の諸々の形に向かって講義をしているのでしょうか。否です。わたくしは、私の感覚に関して、何か奇妙に漠たるものがあるのを感じます。そして、わたくしは、あなた方がすべて理解力と情緒と関心を持っているとは奇妙なことだと思ったりします。ところで、わたくしの興味を惹いているのは、あなた方の心の中へ入って行くところのものです。しかし、わたくしはこれを明晰に知覚し得るでしょうか。できません。実際、私の何となくごたごたした講義の仕方は、わたくしの諸観念があなた方へ明晰に伝わっていないことを示しています。けれども、明晰であるものも極めて重要なものです。それは一種の交通信号です。わたくしが、教室で、有色の形

あるものを一つも見ない場合でも、わたくしは『いやいや、私は心に向かって講義しているのであった。色のついた形に向かって講義しているのではないのだ』と言って講義をつづけるべきでしょうか。否です。とにもかくにも、有色の諸形体は交通信号である。それ以上でもある。つまり、或る有色の形体は美しく、或るものは哀しく、或るものは醜い。で、ともかくわれわれは、宇宙をば有色の形体から成る宇宙と考えうるのです。

しかし、われわれはどのようにして生きるかと言えば、正にわれわれが重要性の感じを得ることによって、こうした漠たる感覚から一組の諸価値を得ることによって、そしてこうして得られた不正確な交通信号によってわれわれと事物との相互関係を決めてゆくことによってなのである。たとえば、夜誰かが車を駆っているとして見よう。事実かれは抽象しているであろうか。天空の美、春の香り、鳥達や虫といったものが存する。が、かれはこうしたことがらのうちから、交通信号を抽象している。さらにかれは交通信号からも抽象しているのだ。かれは「赤」の美を考慮に入れない。かれはただ、かれの運転との関係で交通信号を考察するのみである。

私が解明しようと試みているのは、あなた方はあまたの専門語を習得していられるけれども、これが危険なのだということです。それが実際どういうことであるか、あなた方に知って欲しいと思うのです。というのは、あなた方は、感覚、思考の両者において、無縁なことを一切厳格に鎮圧してしまうのだからです。そして、あなたが思考を導こうとされる努力は、そうしたきつい省略によって選び出された観念、つまり、意識や、大概の感情や、共感や経験といったものすらに抽象を加えて取り出された、一組の手薄な観念、に基けられているのであります。かくして、わたくしがここで表明しようと実際欲していることは、あなた方が抽象によって捨て去った一切のものは、あなた方の全存在にとって、とびきり関りがあるのだということです。

これがわたくしの言わんとする点なのです。専門的著作のうちには、愚かな考えがあって、あなた方は関りのないことから抽象するのだとするものがあります。本当のところは、あなた方が抽象するのは、全く大いに関りがあるも

のからなのです。しかし、あなた方は、自らの行動を嚮導し、或る特定の喜びを享受せんがために、自らの意識の全体を、一組の手薄な諸関係の中に入れてしまうのです。これらの諸関係は、また、われわれが考察に入れない諸関係を前提しているのです。われわれは関りのないことから抽象するのではなく、関りのある諸事実、とり出された諸部分においても当然考慮さるべき筈の諸事実から抽象するのです。

あなた方は、第一に、或る直接的な諸目的を保有しようとしている。しかも、こうした支配的な諸目的は、直接的に観察されている部分の宇宙からは獲得され得ないのです。事柄の性質上赤い色は、「止まれ」と言いはしない。その二つの事の連合は、経験の一大集団によって正当化されるのです。しかもあなた方は、運転している際には、この経験の全集団を無視しているのであります。

更にまた、あなた方は今のところ、自動車の構造を、考察しないでもよい。それらの事一切は非常に重要であるけれども、あなた方は無視するのです。しかし、もしあなた方が自分達のしてしまった事を正当化するように求められた場合には、それまであなた方が自分自身を限界づけていた抽象の働きを、直ちに越えて進まねばならないのです。

けれども、これら抽象作用は極めて危険ではないでしょうか。あなた方の抽象の正当化が変化したとすればどうなりますか。赤が緑ととりかえられたらどうなりますか。抽象の全体というものは、それが妥当性を確保するためにはどこまでも不変でなければならない一組の相互関係を指示しているのであります。

そして、あなたが自身の眼を身のまわりに向ける度ごとに、あなたは抽象するのです。つまりあなた方は、あなた自身がひどく強調するひとつのもののみを見ている。そこに、これらの抽象を全状況が支持——あなた方がそれら抽象を受け入れるのと同じ意味で——するかどうかという問題の全体があらわれることになる。

われわれは関りのある一切の事物を心中に保つはずであると、あなた方はおっしゃるでしょう。だがわれわれはそれができない。つまり、われわれは有限な心を持っており、関りのある事一切を心に保有することはできないのです。

たとえば私が講義する際、自分の使おうとする言葉のことを自分が意識すると、講義はだめになってしまいます。私のいう言葉は、あなた方にとって新らしいのと同じく、わたくしにとっても新らしいものとして現われて来るのです。そしてしばしばそれらの言葉はわたくしを夢中にならせます。それで、たとえば私は限度を超えて俗語を使っていることと思います。数年前のわたくしは、ここで講義する前にラドクリフ〔ハーヴァード大学の女子部〕で講義をするのを常としていました。わたくしは同じことについて講義しようと思っていました。しかし、私がラドクリフでうまく講義をした時には、ここでの講義がだめになりました。というのは、わたくしは、用いた正にその言葉を一々想い出そうと試みたからなのです。しかし、私がラドクリフでどちらかといえば失敗した時には、ここで大変うまくやりました。

さて、要点はこうです。つまり、あなた方がする経験の総体からの抽象は、どの程度に必要であるかということです。これは人によって異ります。けれども、あなた方は、自己の経験をしかるべく扱うためには抽象をしなくてはなりません。そしてこの事をなすためには、あなた方は自余の事物を前提し、それらとの関りを保持しなくてはなりません。

しかし、あなた方がことごとくの事物を考えて行く、高貴な諸瞬間がまれには存在します。けれどもそうした場合とても、あなた方は、実は、ことごとくの事物を考察できないのであります。あなた方は、経験の総体をすばやくかつ細部を見分けずにずっと当たってみるよりほかないのです。それからあなた方は、あなた方が考察していない事物から、或るものを取り出す一次的撰択をしなくてはなりません。これはしかし尚まだいく分ごたごたしています。そして最後に、あなた方は非常にはっきりした主題に落ちつくのです。一つのとてもこじんまりした主題に落ちつきます。他の漠然たる諸々の事柄との関連を定着させてしまったのですから、あなた方は、ついで、これらの関係を、それら関係自身の性格について考察しなくてはなりません。とは言え、それらの諸関係の重要性は、より広範囲な査察

から得られるのです。

しかし、あなた方がもし明晰にやろうと固執するならば、何一つ得ることはないでしょう。あなた方が疑いをかけねばならないのは、高踏的な語句ではありません。「class」とか「and」とか、「together」や「therefore」といったたいしたことのない言葉なのです。驚くほど多様な意味を持っているのは、これらとるに足らぬような言葉なのです。このことを例解するために、わたくしは前回の講義で、ヒュームが次のようにしていることを示しました。かれは一つの「体」(group)を諸性質の集りと称しました。その際、もちろん、一つの集合体というものはそこに存する諸性質によるだけで定義されます。ところで、わたくしがあなた方のうちの一人と知り合いになるとします。するとわたくしはその人に関する新しい事柄を知り、そのことによって、かれは前とはちがった一つの新しい集合となります。しかしながら、わたくしは同一の若い男に向って語りかけているのです。だからして、単なる集合という考えだけでは覆い得ない何物かがそこに存在することになります。かくしてヒュームは、驚嘆すべき明晰な思索家でありましたから、かの結合の原理を導入するの止むなきにいたったのです。さきの人に関して云えば、そこに同じく統一の原理が存在するのです。が、ただその集合は別のものになっているのです。

しかし、統一の原理とは何であるか。それは内的なものなのか、外的なものなのか。十戒や掛算の九々の表の統一の原理をとってみましょう。それらは、共に統一の原理といっても、全く異なっています。あるいはまた、魂と呼ばれる別種の統一の原理が存するし、そしてまた、あなた方の心身の統一の原理が存します。こうして、あなた方は形而上学の全問題と直面しなくてはなりません。

これが、われわれは明晰でなくてはならないという場合に、わたくしの意味することであります。われわれはわれわれの考えを、経験によって例解しなくてはならない。たとえば、私は地面に向って落下する事物の例を、一つだって今の瞬間見てはいないのに、運動が本質上は不連続であることを示したいとわたくしは考えているのです。立派な

本には、われわれは物理の諸法則の一切をすべて一ぺんに心の中に持っているのだと書いてはあります。われわれは、しかし、こうした諸々の方程式のすべてを心の中に持っておりはしない。または、たとえ持っているとしても、それら諸法則の諸例までも心の中に有してはいないのです。

あなた方が街路を横切っているとします。そのときあなた方は全く頭を空にした状態になっています。だからわれわれは心中に複雑な定理を見ているというのは全くの無意味です。

形而上学的諸理論の大部分は、宇宙の完全な理解ということだけに関しての論究に尽きています。だから、人間の経験の実状がいかなるものであるかは、今まであまり論述せられて来なかったのです。人間の経験が混乱し曖昧なさまにある実状はいかなるものでありましょうか。これらの論究は、人間の経験が散発的に行われ、そしてその上に一般性を構築するということを示してくれます。人間の経験は、それ故に、これら一般観念を散発的に立証しているだけです。

ところで、これまで本に書かれて来たことは、明晰性の観点から書かれています。つまり、われわれの見るところを明晰に語ろうということだったのです。

これが何故わたくしが、いつも曖昧性と明晰性とのしかるべき統一が必要だと繰り返し述べるかの理由なのです。われわれは明晰であろうと欲します。しかし、われわれの経験を犠牲にしてまでそうしようとはしないのです。そして又われわれが曖昧であろうとするのは、ただ宇宙の複雑性に不公正たることのなからんため、換言すれば、宇宙は本質的に明白なのだと強弁しないため、なのであります。

だからして思索というものは、一つの近似にすぎません。しかし、もしわれわれが、ひとたび合理論をしてそのなすにまかせ、世界の無限性とその相互連関性を見過すならば、われわれは過度の単純化をなすでありましょう。こうした単純化は大変価値のあるものではあります。しかしまたわれわれは完全なる混乱を造りがちでもあります。で、

われわれがプラトンとロックとを代々引き合いに出す理由は、かれらが常に合理性の立場と、同時にまた、事物の普遍的にして一般的な曖昧性すなわち相互連関性の感覚とを、保持していたからであります。（一九三六・十二・三）

二　抽象（一）――合理的知識

前回の講義において、わたくしは抽象化という主題について論じました。その論究の際、高踏的な術語を用いずに論じましたが、指摘しようとした事は、われわれ自身の経験が有限である故に、われわれが何らかの程度で意識している現存在の機会（occasion）は、実は抽象の一機会（一例）であるということです。そしてその場合、その一機会の強調があり、さらにまたそれ以上に、われわれがはまり込む合理的習慣の考え、即ちそういうカテゴリー（抽象され強調された相）が実在するという考えがある、ということです。

私はこの事をわたくしの思い付くことのできた素朴な例を一つ一つあげて例証しました。そしてわたくしは専門語にはまり込まぬよう努めました。というのは一つ一つが直接的な経験であるからです。「強調」という語がまさに抽象化を意味しています。つまり、それは一つの事物に仮の優先性をわれわれが与えることを意味するからです。哲学は宇宙の無限性を考慮に入れた観点から書かれている。本に書かずに講義をしているときでさえわたくしは抽象的であらざるを得ません。そこには常に抽象化の過程が存します。

さて、わたくしは科学の哲学に立ち入りたいと思います。科学は諸抽象観念についての、即ち抽象観念の一つの体系についての一つの議論です。わたくしはベルグソンと共に、経験の瞬間的なひとつの相は、実はひとつの抽象であると言い続けて来ました。

ところで、われわれはこれら抽象の諸相の座標づけを要求します。抽象の体系とはこの座標づけであり、諸々の抽象とは、強調点を附与された経験なのです。

経験の「機会」(occasion)であるところの諸々の抽象というものが存在し、そしてその一つの組み合わせが、一つの共通の性格（一つの焦点に集中された強調）を有することによって、抽象観念の一体系へと形成されます。その共通の性格というのが先に言った座標系なのです。

さて、人間の知識は、それぞれ経験の機会であるこれら諸抽象に座標を与えようと求めます。私は、知性が必然的に宇宙を歪曲するというベルグソンの考えを回避いたします。

けれども、諸抽象の体系とは、一つの共通性格に附与された一種の長持ちのする強調であるというこの定義のうちには、大いなる前提が忍び込んでしまっています。われわれは「多くの体系」と言った方がよいかも知れません。いろいろの体系が用いられ、一組みにされて、本質的な超体系にされているのですから。たとえば見られる物はすべて相互に関連づけられ、この場合は、全視野という超体系が座標づけの原理となっています。そして更に一層の相互関連があります。あらゆる場合を総括する超体系は、一切、即ち宇宙であります。宇宙の完全な理解（神のみに可能なものとしての）は、そういう総括的超体系です。

しかし、そこでわれわれは普通の用語法により、『その総括的体系の哲学』という言葉を採用し、それが総括的超体系と近似的な知識を指すと考えることができます。

わたくしの申すことの要点は、あなた方が環境から抽象された諸々の物事を有している場合、――もしあなた方がものごとをそもそも考えているとしての話ですが――常に、そのものごとの背後にずっとのびている触手が、そのものを含む総括者、即ち環境にまでいたっているということです。

例を一つ挙げましょう。算術において、数とは何でしょうか。それは一つのクラスに特殊な乗法を行ったものです。これは全くうまくゆくとあなた方は思うわけです。それでは、出現するいかなるクラスのことでも素朴な仕方でナイーヴに論ずるとして、あなた方は一つのクラスの総体を見出すかどうか。あなた方は、わたくしの五本の指と、それ

ら指のクラスを有します。――そこであなた方は、六つのものを有する。さらに、そのクラスと六つのものは別のクラスを作ります。かくしてあなた方は七つのものをもつことになります。こういう算術は見事な思考方式の一つであり、わたくしはそこに見るべきものがあるのを確信しています。けれどもそれは矛盾にあずかるのです。

その結果、あなたは再び尋ねます。――一つのクラスを構成する共存性とは何であるのか。

こうしてあなた方は、今や形而上学の大河の堰を切っておとしたのです。あなた方が形而上学に関して自然な問を発する場合、あらゆる主題がそこにふくまれることを見出すでしょう。しかしまた、幾人もの人が束になって騒々しく抗議し、そんなものは形而上学ではない、というのを見るでしょう。しかしかれらは、形而上学の勝手な定義を設定しているのです。

実際のところ、われわれは便宜的に中間的な家を造っています。そして、数学がその家です。数学は形而上学とはみなされていません。

ここでわたくしは一つの意見を出したいと思います。

近代科学の一大過失は、経験が全般的な超総括者との関係において有する曖昧性を見落したということでありましょう。

われわれの意識が、きっぱりとした境界を有しないというのは残念なことであります。われわれの意識の限界線は漠たるものです。それは、何が漠然としており、何が明晰であるかということにかかずらおうとさえしない。けれども、あなた方の明晰性の焦点が変わる瞬間毎に、あなた方の経験はあらゆる段階にわたる漠然さに及びます。美とか図形とか数が、いろいろな事物のうちにあってわれわれを引きつけます。美学的な評価においては、「全体」があなた方を捉えます。これが最初に起こることです。それから、総体というものは、あなた方が細目を吟味するにつれて茫漠となります。あなた方は、全体に注目し部分を従属と見るか、又はその逆をします。それよりも尚、こうしたこ

とはあなた方の経験のすべてではないのです。あなたが寺院を見やって宗教的法悦に打たれてしまっているとします。——しかしあなたが空腹になる。すると寺院は背後に沈んでしまっています。

かくして、われわれが勝手にわれわれの経験の重要な諸面を排除してしまうと、われわれは哲学的思索を停止し得るのです。この排除は極めて自然なので、わたくしが明白な例を挙げれば、あなた方は吹き出してしまうほどです。これは何故かと云うと、あなた方が実際に事実を知る場合、全事実をあなた方は見るにいたらないからであります。哲学で己惚れたらおしまいであります。ほしいままな抽象というのは、独断的です。すべての宗教はそうした独断的抽象を行います。われわれは宗教を、それが独特な仕方で独断的であるとして非難します。というのはそれらが保存するのは或る物事、つまり、われわれの好奇心を喚起する他のものを排除する物事だからです。しかし、あなた方がこのことに着眼してみられると、宗教はいろいろな機構のうちでももっとも独断的でないもののうちに属しています。というのは、宗教は、未だ明晰に理解されていない神秘的な経験で歩をとどめるからです。勿論これは、より立ち入った吟味を捨ててしまいます。宗教のいうのは、こうした経験は極めて重要な経験であり、それらの証明がもやもやしていても、それらの明白な重要性は減じないのだということであります。

こうしてここで、われわれは、哲学に繰り返し幾度も忍び込む一つの仮定、つまり、有限なものごとから成るはっきりした種目が互に分離されて存しているという仮定と対決し合うのです。人間や、犬、等々の種目があります。言われているところによると、これらは明晰な区別であります。たとえば、犬と人間の間には大きなギャップがあります。けれども自然は決して、われわれが自然のうちに想定したがるような鋭い切れ目をつけはしないのです。自然には幾重にも、もじゃもじゃしたふさべり（fringe）がたれ下がっているのです。人間性の能力を定めるいくつかの新しい青写真が存するのです。

われわれが常に有限であるというのは全くもって確かです。前進はあるかも知れません。われわれの形而上学的知

識を前進させ得るが、文学に関しては低能な人々がいるかも知れません。肝腎なことは、良識の命ずる停止というものがあるということであり、あなた方はさしせまった問いを問うのを差し控え、そのことによってあなた方の知識をあなた方の総括的な諸々の抽象の有する諸関連のところまでに制限するのです。

この際あなた方は、一つの体系の諸帰結があなた方の注意を他の体系へと惹く動機を与えるものだと解するのであります。

路上の交通をとってみよう。運転している際、あなた方が関わっている抽象の体系は、交通信号や動かさねばならぬ梃子等々からなる体系です。あなた方は運転することが何故必要かということを論じていはしないのであり、専ら運転に当っているだけです。けれども、そうした全経験は、その背景をその総括的体系のうちに持っている。つまり、或る理由によってその体系のうちに存在しているのだという感じが存するのです。あなた方は車に乗ってどこかへ行こうとしているのです。或はまた、あなた方は快速を楽しみたいのです。けれどもこの理由は、あなた方に、別の抽象の体系を与えます。あなた方はあなた方の運動に含まれる道徳性を問うたりはしない。あなた方は、自分達を養育し、共通の道徳性の内に留める、かの讃仰すべき仕方を信頼しています。あなた方はこうした事を全然考えさえもしない。けれども、その理解のためには、抽象の諸体系の全部を採り上げねばならぬのです。

数学的思考が困ったものであるというのは、それがあまり深いところまで行かないということです。それはつぎつぎに生起する感覚的なものを扱います。全く形而下的な経験のみを扱います。けれども、わたくしは、感覚の集合体に向かって講義しているのではないという、そういう奇妙な感じを持っています。わたくしの形而上学的な信念は、あなた方が客観的実在性を有し、わたくしの講義を経験し得るのだと、私をして信じさせるのであります。

しかし、科学は感覚の与える概念のところで止まってしまいます。わたくしは、科学は概念をも必要とすると申しております。あなた方は、「わたくしは感覚に向かって行くのだ」とは言わない。「わたくしは実験室へ行くのだ」と

言う。自然の基底をなす諸々の活動が現実にあるのだという感じは常に存する。そしてこれらの諸活動は、時空上の相互連関性を有しています。けれどもそこにもまた再び、時空上の相互連関性とは何を意味するのかという問が存します。この問は形而上学全体を呼び入れることになります。しかし、科学はここのところで停止しようとするのです。

かくして、科学者というものの具有しているのは、単なる諸感覚の様式であります。或いはまた科学者は、「いや、それらの諸々の活動を定める一組の方程式があるのだ」と言い、そして、そこのところでやめてしまうのです。しかしこれでは、あなた方は、科学者の全根拠を打ち倒してしまったのです。あなた方は、継起の諸形式についての空虚な認識を持つだけです。しかし事実上は、もしあなた方が感覚に関して非常に厳格に考えるならば、科学の観点から言われる認識というようなものは、感覚の中には存在しないのです。結局まさに科学の停止するところに、興味ある あらゆる問が現れるのです。

（一人の人が科学者であるかどうかということの全論点は、その人が科学のための一切の根拠、即ち形而上学を放棄しようとするかどうかと結びつけられているのである。）

事実、あなた方は、もし丁度そこのところで止まり、それ以上に、馬鹿げた問を問わなければ、とても素晴らしい明晰性を得るというわけです。

わたくしは、或る問にわたくしの年上の従姉の答えたのを想い出します。彼女は申しました。『アルフレッド、馬鹿はおよし。』科学と、わたくしの年上の従姉は同類です。しかしそれは実証主義者の理説であります。

（一九三六・十二・五）

三　抽象（二）——科学の哲学

すべての究極的な決定は、あなたの経験の総体に由来する。しかしながら、日々の生活では、理由などというもの

は一つの礼儀的な約束事となって、決断のさ中では看過されている。理由というものは、ひとたびそれ自身の現象の体系のうちに場所を見出すや、別の抽象の体系へと移されます。わたくしは車を運転している人の例を与えておきました。それは、運転することの全背景からの抽象の大変よい例であります。その背景はまた、その運転の動機を説明する抽象の体系から、抽象されたものであり、この体系はまた、彼の道徳的制約、つまり別の抽象の体系を構成するもの、に関係づけられているのです。

だからして、いかなる抽象の体系もかつて自己充足的であったことはないのだとわたくしは言いたい。つまり一つの抽象の体系は、背後にあるもう一つの抽象の体系に常に基けられているのです。だから、もし抽象しすぎたならば、とるにたらない結果が生じる。あなた方は、あなた方の行為に意味を与えた理由を失うことになる。理由というものをよそにしては、何らの重要性も存し得ない。重要性と理由とが同義語であるというのではありませんが、両者は不可分離的に結び付けられているのです。だからして、理由を欠くならば、決断はつまらないものとなります。というのは、それは重要性を欠いているのですから。

さて、科学においてもこの事は当たります。科学にはいろいろの抽象の体系があります。ところでもっとも明白な抽象は、あなた方の経験の中で正確という特質を有する要因に注意することでしょう。これらはあなた方が考えているほどには正確でないのは勿論です。本当に正確なものなど一つもありはしません。もし、あるとあなた方が仮定なさるなら、あなた方はすぐに矛盾を起こすでしょう。観察はすべて近似の過程です。あなた方は、他のどんな形式よりもより高度の判明性を持っている直接的な感覚表象から始めることができます。だからして、感覚の諸形態を観察する努力は、明かに、事物の本性について或るはっきりした理説を得るの始まりであります。これは一つの理説に確信をいちばん与え得る、または、もっとも現実的な類の、基底であります。しかし、明晰さにおいて劣っても、重要性では大なる事物が存します。というのは、たとえわたくしが盲目であったとしても、わたくしは講義をするでしょ

うから。講義というのは、結局、あなた方が現にいるということをわたくしが直接この目で見て実証することよりも、もっと重要であります。講義をうまくやるという業は全くもって漠としています。あなた方はいつも自分の考えを十分にのべえたかどうかと思います。これは実に重要なことですけれども、大変漠としていることは申すまでもありません。講義という仕組みは、ハーヴァードの生活では重要なものの一つです。そんな訳で、わたくしは、判明性と重要性が大変異なったものであることを解明したいのです。とは云え、あなた方は、宇宙についてのあなた方の理論の検定をしうる事例、つまり、判明な経験を用いることはできます。このことは非常に満足のいく一つの経験であります。けれども、わたくし個人は、近代哲学においては、爾余の経験から抽象された際に感覚されたものが持つ重要性は、大いに過度に評価されて来たと考えます。というのは、一つには、もしあなた方が、感覚されたものを単にそのものとして取り上げるならば、それはどんな「理由」も与えないからなのであります。きりはなして与えられた理由の単なるきれはしなどは、全然何の意義をも有しない。あなたが一つの古い建物を見ているとする。それは古くてぐらぐらしている。あなたはこれはまもなく倒れるだろうと言う。けれども、あなた方にその建物が直ぐ崩れ落ちると思わせるのは、その建物が灰色だからではない。あなた方に理由を授けるのは単なる感覚されたものなのではない。このことが正にそうであるさまがいかに鮮烈なものであるかを、あなた方に悟っていただきたいと思います。それからまた、もしあなた方が感覚されたものからの単なる抽象以外の何物も与えないのならば、あなた方は、何らかの事に対して何らかの理由を持つということはないのです。感覚されたものの説明は、すべて抽象の体系にあり、感覚の段階を超えています。

このことを強調するに当っては、わたくしはただヒュームに従っているだけです。というのは、ヒュームが言っているように、感覚与件は、知られざる諸原因から生じるからです。かれは、われわれが知るのは感覚印象のみだ、といいました（これは全くまちがっていると私は思うが）。そこでかれは、あらゆる感覚与件は知られざる原因から生

じていると感じたわけです。かれは多くのことを余りにも過度に単純化しようとしました。その上、大切なのは（ヒュームの言うように）単なる繰り返しなのではありません。わたくしは、二十九回講義を今までにしたのだから二十九度感覚を有したのであり、それ故に聴衆のあなた方が再び現れると期待する、とは言わないのです。実際わたしくは、あなた方に最初の講義をする前ですら、あなた方の出席を予期していたわけであります。

わたくしが強く主張したいのは、われわれの経験についてのわれわれの習慣的な信念というものと、すべての事を醇乎として感覚的なる経験から発生させる、現在のところ優勢な理論とが、いかに相反するものであるかということです。勿論もし、或る一つの事柄が感覚されたところのものから来たのだという、神の啓示が存在したのであるなら、わたくしは神の啓示に服しもしよう。だが、もしわたくしは、わたくし自身の知識に依存せねばならないとしたら、わたくしはそういうことを信じないのです。

科学は、感覚によって実証することに自らを限っている。そしてこれらの実証ということは、異常なほど判明であるという長所を備えています。量子力学を信頼する理由として、深い道徳的満足をもち出すような科学者を信じる人は誰もないでありましょう。

実際われわれが、科学の欠いているものとみとめるのは実証ではありません。わたくしは、感覚での段階で実証を行おうとする科学者の位置を弁護し、これらの実証は判明であるがゆえに重要であると強調したいのですが、同時に、この立場の奇妙な一面として、純粋に感覚的な経験というものは取るに足らぬことを指摘したいのです。

かくして奇妙なことになる。つまり、あなた方が自分の経験の持つ判明な部分を強調し始めるや否や、あなた方はより深い経験を得るのです。が、もしあなた方が感覚所与を強調しすぎると、再びつまらぬことになります。かくして、あなた方は中庸へと立ち戻ります。これは、本当に判明且つ明晰なものをわれわれは何一つ得られないという悲しい事実へわれわれをつれ戻します。

ここ（Adventures of Ideas, chapter on cosmology）まで来たら、あなた方が或る抽象の体系を心中に懐く限りにおいて、自然の法則の或る組み合わせがあなた方の心の中で顕著となるのだ、ということをお話ししましょう。そして又、わたくしが読んでおいて下さるように頼まなかった幾つかの章があります。わたくしの本『自然の概念』（The Concept of Nature）からの二三の章がそれですが、それをわたくしは読んでみたいと思います。全くそれは、悲しくなるほど漠としています。わたくしはこう言っています。

『自然とは、感覚を通じてわれわれが観察するところのものである』。それからまた、『感覚作用とは何であるのか』。『それは思考を含むのであるか』。（わたくし自身の見解は、知覚の意識は思考を含むとする。知覚は、単に黒い模様が牡蠣に及ぼす結果にすぎぬもの、なのではない。つまり、知覚は、われわれにあって牡蠣にはない意識、を含んでいる。わたくしは牡蠣がどんな事をするかは知らない。牡蠣は黒い模様を好み、それを求めるかも知れぬ。けれども、それは知覚の意識のない情緒的行動でありましょう。しかるに、もしわれわれが『やあ、黒い模様よ』と言う時には、われわれは直ちにわれわれが経験していることに気付くのです。われわれは、『そこに黒い模様が一つあるが、それがそこにある必要はなかったのだ』と言います。それが意識なのです。だんだんと目ざめて行く場合のあなた自身を吟味してごらんなさい。覚醒する前にはおおよその模様が漠然とあります。覚めるにつれて、意識が飛躍して識別となります。あなた方は経験の覚知をするに到ります。実際、哲学の体系のいくつかは、存在の必然性の考えからともかく始めたがります。あなた方が思索を始めるや否や、存在というものに必然性が存するのだというのには私も同意します。しかしながら、存在の偶然的性格というものもまた存するのであります。そして意識というものは、偶然的なるものをそれと悟ることなのです。だからしてわたくしは、意識的な経験には心の作用が存すると主張する。このことの結果あなた方は、自然についての感覚以上のものを含む経験を持つことなしには、自然科学の根底を説明するような要因が自然の中に存するのを判明に観察し得ないのです。

だからして、抽象の体系はどれも本当には自己充足的ではないのです。もちろんあなた方は他の側面のことを述べる必要はないのですけれども、もしあなた方が十分な数の疑問を起したならば、その体系にふくまれない他の事も問題になってくるのを見出すのです)。

わたくしの『自然と思惟』(Nature and Thought) の章では、わたくしは自然について統一ある概念を持ってはいません。その章は科学の実証論的側面についての議論ですが、わたくしはそれを弁護し得るものと尚主張します。

(わたくしは自然のことを、形態の一群であると時々申して来ましたし、他の時にはまた自然は或る最終目的を目指しての形成であると言って来ました。きちんとした哲学者なら誰も、わたくしがしたようなこんなことをしはしないでしょう。そしてわたくしが本を書いた時、わたくしは自分がこんな事をしてしまったことを分らないでいたのです。しかし哲学者ならば自分のやったことを少なくとも意識しているべきだったのです)。

また、科学において、あなた方は言語というものに当然恐ろしく注意深くあるべきでしょう。あなた方は、考えていることのすべてを言うことも、または考えていることをぴったりと言うことも決してありません。たとえばわたくしは、『このコレッジの建物は勝手がよい』とロンドンにある一つの建物について言います。けれどもこれは、何とまあ抽象が入り乱れたものでしょう。そして何と漠然としていることでしょう。わたくしは、英国、ロンドン、リーゼント公園、リーゼント・コレッジの中の一つの建物のことを言おうとしたのです。しかし私はさっきのことを、それのいくつかの部屋について言ったかも知れないのです。で、もし抽象されたさっきの「それ」(it) がここでは見当外れであるとしても、「それ」はとにかく勝手がよいのです。先の指示文は重要なものではなく、漠然としている。しかし、実際問題として話し手は、自分の語っていた建物が、特殊な目的との関連においてのみ勝手がよい、と多分言おうとしたのでしょう。そうすると、指示的な機能を持つ『それ』(it) とか『これ』(this) は、意義を有していたことになります。述語は、主語を指示する用語の一部であります。あなた方は『それは素晴しい犬だ』と言います。

あなた方の意味するのは、それは『素晴しい犬性』であるということです。述語は主語の記述の一節を成しているのです。

こうしてあなた方は、言葉の各句がどうしようもないほど曖昧なのを絶え間なく発見するでしょう。そして、単なる議論上の勝利が得られるのは、こうした曖昧な事柄を無視することによるのである。（一九三六・十二・八）

四　科学と抽象

わたくしは、科学の哲学の教説をわたくしなりに論じて来ました。そして、科学ですら或る抽象の体系に基礎を置いているという事実に、わたくしの教説を基礎づけようとして来たのであります。また、次のように言ってもいいでしょう。あなた方が抽象の一体系を焦点に置いている間、あなた方は、あなた方の経験の他面をなし背後に漠として存するより広汎な場面から、目的を導き意味を与えている、という事実に、わたくしは自分の教説を基礎づけようとして来たのです。しかし、瞬間的な出来事がその重要性と目的を得るのは、目下のところ支配的でない、より広汎な側面からなのであります。いかなる事実のふくみも、ねらいも、その基礎を、ただ一つの抽象の体系から得るわけにはいかぬのです。わたくしはもう一度、自動車の例へ言及します。注目の焦点にあるところのものが、出来事に意義を与えるのではない。その理由は、あなた方のいろいろな目論見が、あなた方の心の中で判明である限り、あなた方の経験の背後に或る他の抽象の諸体系が存するというにあるのです。あなた方が有限な体系までで留まろうとする場合には、いつも、たとえその体系がそれ自体で完全な体系であるとしても、批判的な分析に照してみると、その根底がいつも抜き取られているのを見出すのです。というのは、その体系が道徳的なことや美学的なことを述べているのだと称したとしても、それは無意味な諸様式を述べているのにすぎないのです。あなた方は道徳的なことを求め、そして「十戒」を授けられる。しかし十戒も、それが完全な体系のうちにおいて見られるのでなければ、どういう役に

立ちうるでしょうか。

かくして、あなた方は自分の体系をできるだけ深いものとします。そしてあなた方が、自分達の体系をより深く、かつより判明なものと感ずれば感ずるほど、あなた方は、自らの経験の「総体」が途方もなく重要性を有するのだということをよりよく悟るのです。

神を論じてみます。あなた方は坐っていて、そして「必然的存在」と言う。これは何を意味するのであるか。神秘的経験ときおり名付けられるものは、われわれの許に容易にとどまっていてくれないものであるとわたくしは信じる。これらの諸観念は重要であるけれども、意味のないものになりがちであります。

けだし、経験の絶対的判明性の観念は、それがはっきりと斥けられている時でさえ、言語に浸透していることをあなた方は見出すでありましょう。

人間の経験の漸次的発展という事実は、まさに正反対の見地であります。人間がますます知性的になると言いたいのではありません。人類は急速に退化するかも知れません。わたくしがまさに言っていることは、もし科学と歴史に何か意味があるとするならば、われわれは文明を漸次構築してゆく洞察の閃きを持っているのだということであります。そういった風に人類は最近の二三千年の間発展して来たのです。それは分別と洞察の力をいろいろ獲得して来たのです。更にまた、人類はこれまで有限数しかいなかったのですから、人類を一つの連続的過程と称することは出来ません。経験され、保持された幾つかの閃きがあったのです。言語を形成したに相違ない閃きの系列をお考え願いたい。

とは言え、わたくしの言うことの要点は、われわれの各々が、どんな言語上の表現をも超えた洞察を連続的に噴出しているのだということであり、そしてこうした洞察はわれわれが意のままに保持し得るいかなるものをも超えているということです。このことの明証は、あなた方が大文学を読む場合、その文学があなた方に感銘を与えるのは、あな

た方の魂のうちにあなたの人生を通じて横たわり眠って来た何物かを、それが突然判明ならしめるからだという点に示されています。プラトンがこのことを言っています。それが、われわれ――われわれの中の或る者――のプラトンを愛する理由の一つです。こうした種類の内的な顕示は想起としてわれわれに現われる。それは、われわれの生活の中にあったのですが、われわれの意識の力の真下にあったのであります。

だからして、われわれの知識は単に専門的であるだけでなく、存在するところのものについての知識のこういう潜在的な源でもある。それは常に、想起のひびきを具している。これはヨーロッパ哲学の最初に現われる学説である。しかもプラトンが重要だという理由は、まさにかれが、洞察の閃きの重要性を悟った最後の哲学者だからです。

大概の哲学は、われわれが多くの事物について明瞭な観念を持っているのだという事、及びわれわれをわずらわす唯一の事はその観念にとって何か或る偶然的な事物が起こりはしないかどうかということだけであるという事、以上のことの了解をもって書かれています。しかしわれわれはこの種の本当の知識を、一つも持っていないのです。わたくしの『自然の概念』の最初の章においては、現在の程度にもこの考えを明晰にしていませんでした。しかし勿論、わたくしはこれと同じことを言おうとしていたのです。わたくしは自然についての人々の経験を、諸事実（facts）、要素（factors）及び事物（entities）に識別します。最初のもの、即ち諸事実は漠然としており、半透明な陰影を持っている。それから要素のうちにも、この世界にあって漠然と識別されている要素であるところのものが存在します。たとえば、この卓子といったものがそれであります。このようにして、ものを抽象して取り上げ、それを『それ』(it) として論ずる、思考の更に飛躍した一段階が存することになり、そうしてから、わたくしはそれと他のものとの関係を論ずるということになります。あなた方は、それを空間的および時間的に論じます。あなた方は『それ』を把握する。あなた方はそれをあなた方の知識の実在性から抽象したのです。

これらの最後のものが『事物』であります。事物というものは思考の抽象の働きが優勢になった時に生じます。

『事実』は世界の持っている「他者性」の総体です。その他者性がわれわれに経験を押しつけるのです。要素は、事実にその重要性を与える、事実の漠たる識別であります。要素は事実と事物の中間者です。そしてこれらの識別はわれわれの経験に、経験ということの異常に膨れ上った意味を与えるのであります。しかしながら、事実への集約ということすら、宏大な場からの抽象を意味するのです。知覚というのは、強調と棄却の一様式であります。それは行きすぎない限り、経験を強化します。というのは、行きすぎると、重要性ということに対して知覚が与えていた理由が失われてしまうからです。集約化は、最後には、瑣末化を始めます。もしこれに反して、経験を直ちに余りにも拡大しようと試みるとするとこれまた瑣末化です。知覚は、現在点においてわき立っている重要性に正しく顧慮する、適正な集約と抽象なのであります。

自然科学は奇妙なものです。というのは、それは、重要性ということについて動物が自然に持つ感情を却けているからです。つまり、正邪に関する重要性の感情と言ってもよろしい。学問的活動をしている際の人間は、正邪についての問に関らないことでしょう。

法王が一言したことがあります。『信心のない天文学者は狂っている』。これはこの上なくありふれた意見の一つで、有益であるよりもむしろ有害です。けれども、とにかくこれは、科学者が当然承認しながらしかも科学の域外に残す、究極的重要性のかの奇妙な感じをとらえています。

プラトンは、数学と科学と一切の知識の包括的な意識を心中に有しておりました。わたくしが引用して止まないプラトンの一節があります。かれは、基数では表現され得ない比の存在を発見し、基数のこの破滅は、かれの情緒的経験および道徳的な経験と究極的には結び付いていると感じたのであります。どんな馬鹿でも、数が情緒的経験における一つの要素であることを見てとれます。だからして、数の学、即ち算数は、美的経験の精妙さを展示するのであり、深い情緒的経験にとり巻かれがちであります。プラトンは、実にこのことを、快適な音と調和に対する数的関係のう

ちに見てとったのであります。

ここでまた、この情緒的な意義を論じながら、わたくしは何等新しいことを言っていないのです。というのは、プラトンはしばしば道徳的および非道徳的音楽を論じます。古代人は彼等の解する限りでは数によって表現し得ない量の関係が存するのを見出したのであります。かくして、かれらは、この比は非常に大きな情緒的意義を持つにちがいないと結論しました。

『この事を知らない人々がいるとわたくしはいわれたことがある。わたくしには、そんな野卑な無知が存在するとは信じ難いのだ』。こうプラトンは『法律』で言っているのです。

科学者は、バイオリンとかなんとかかんとか、そうした一切のことに関りはしない。かれは単なる物理的事実を考究する。しかし、そこには、つまりその背後には、全体にわたって、重要性についての漠然たる感覚がいつも存在します。知的能力を示すによいゲームがいくつもある。たとえばチェスがそうです。けれども、あなた方に対して私は一般的にこういいたい。もしもハーヴァードの学生諸君が、実験室を空にしてしまって、数学を習い、しかも単にチェスの知識を高めようとしているのだということをわれわれが見出したとでもするならば、われわれはそうした重要性が失われてゆくのを感じることであろう、と。チェスにふりまわされるとしたら、われわれは全く第二流の群集でありましょう。

これはまた、まさにわれわれの歴史にあるところのことであります。四世紀の教養あるローマ人達は、後から読んでも、前から読んでも意味をなす詩を書きました。そしてこれが、当時のローマ社会の頽廃の良き証しなのであります。要するにかれらは大した生活を送っていなかったのです。幸せな生活ではあったかも知れませんが、あまり重要でない事柄で楽しんでいたのであります。

もちろん将棋さしがいけないことはありません。しかし、もしかれがチェスにのみ関わっているのなら、つまらぬ

事にふけっているのだと言うべきです。将棋さしは要するに、社交の一部にすぎないものとしてのチェス、つまり、相対的意義しか持たぬ将棋というものに関わっているのです。

わたくしは、このことはすべての職業に当たると申したい。「教会」で起った最初のことは、人々がかれら自ら砂漠へ行って、永遠の真理を考えるべきであると考えたことでありました。けれども近代の教会は、反対に、瞑想的な生活をすべく選ばれた人々を摘出するのに用心深いのです。瞑想の生活さえ、大概の人の場合、つまらないものと成ってしまい得るのです。

エジプトの隠者達はつまらないのだという悲しい発見が「教会」の歴史なのです。しかし、僧院の制度が意義あるものとなったのは、僧侶達が、考えることよりもする仕事をより沢山与えられた時である。あなた方は、抽象の一体系にのみ強調を置き、その体系を経験の一切であると主張することはできないのであります。（一九三六・十二・十）

（訳者　京都大学文学部〔哲学〕助手）

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this manazine is to be given together with the last instalment of the article.

Whitehead's Lectures on "Abstraction"

The following statement written by Professor J. D. Goheen as a foreword to the Japanese translation of Whitehead's lectures would also be a good précis of the article.

"These notes are an almost verbatim record of Whitehead's lectures in his course, *Cosmologies; Ancient and Modern*, on Dec. 3, 5, 8, 10, 1936. In the previous meeting of the course I had, as his assistant, given a lecture in which I asked Whitehead to make more explicit his doctrine of "vagueness". Students in the course sometimes received the impression that Whitehead disparaged clarity and advocated "vagueness" or "muddle-headedness" in philosophical thinking. Whitehead, of course, intended nothing of the kind, but he was profoundly interested in the relation of abstract thought to the "penumbral" background of experience. From one point of view, Whitehead's metaphysics could be construed as essentially concerned with this relation. The world of "process", which Whitehead thought of as initially disclosed in experience, is a world in which everything is related to everything else. Finite "facts", as well as finite truths or abstractions have, therefore, to be accounted for against a background of reality and experience which is unbounded. An abstraction or finite truth is, in this sense, arbitrary; there are always others in the background which might be expressed, but are, for good reasons or bad, suppressed."

The Essentiality of Human Group

by Hitoshi Takatsu